

体育授業におけるアイデンティティ形成に関する実践的研究 —小学校2年生体育実践を通して—

浅見 元則

Identity formation in physical education classes Practical Research

— Through elementary school 2nd year physical education practice —

Motonori ASAMI

1. 問題と目的

小学校学習指導要領解説体育編¹⁾では、体育の目標に、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する」という主旨が含まれている。このことにより、生涯にわたって運動やスポーツを日常生活の中に積極的に取り入れ、生活の一部とすることを目指していると考えられる。生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現した人の中で、中野²⁾や宮崎³⁾のような例がある。中野や宮崎は、陸上競技をする前の自分、始めてからの自分が異なる。スポーツについて、何らかのアイデンティティが形成されたと考えられる。

エリクソン⁴⁾は、アイデンティティの概念の特徴として、「自分が何者なのか知ること」【自己意識】、「他者や社会との自己意識」【他者からの影響】、自分が自分を理解するという自己理解【継続】を挙げている。そして、Lave&Wenger⁵⁾は、「学習は状況の中に埋め込まれている」という正統的周辺参加論を提唱している。この正統的周辺参加論では、すべての学習はいわば「何者かになっていく」というアイデンティティの変容を伴う自分づくり、つまりアイデンティティ形成過程であるとしている。言い換えると、アイデンティティ形成とは学習者のアイデンティティの変化と捉えることができる。そのように考えると、体育授業では、アイデンティティは生まれ変わっている可能性がある。

しかし、学校現場で行われている体育授業では、アイデンティティ形成に影響を及ぼす自由意志、自己決定が尊重される学習よりも、単元目標の関心意欲態度に規律が求められたり、目指す子ども像に無理やり近づけられたり、協働されたりし、

児童の自由意志、自己決定が妨げられている様子が見受けられる。このようなアイデンティティ形成が妨げられていることを問題として捉えている。

以上のことを踏まえ、本研究では、「自覚された自分」を調べるために、授業の状況から児童の自己言及を読み取り、アイデンティティに該当するものを抽出する。そして、体育を通してどんなアイデンティティが形成されているかどうか考察する。

2. 方法 — K小学校の実践—

2-1 研究方法

本研究は、「体育授業におけるアイデンティティ形成に関する実践的研究」である。そのために、K小学校2年生の走・跳の運動遊び（かけっこ・リレー）の実践から、体育授業でアイデンティティがどのような影響を受けているか見出そうとする研究である。単元はすべての授業を、競走にした。そして、毎回授業終了時に、「絵日記」へ考えたことや気づいたことを子どもに書かせた。その記述から、アイデンティティ形成にどのような影響を与えた可能性があるか考察することとする。

2-1-1 実践対象者・授業者

実践者：筆者（教職10年目）

対象者：K小学校2年生1クラス

1組29名（男子：14名、女子15名）

2-1-2 実践

本実践では、時系列を示す指導案は保留した。その理由は、「競走」をする機会を十分に確保するためである。そこで、本実践では、単元すべての授業で、「競走」を行うとした。単元のはじめにゲームとルール説明をし、その後に、かけっこ・リレーの競走を行った。単元中盤より、リレーを実施し、同じチームの児童とのバトン渡しの連

携を向上させるリレーの「競走」をする十分な時間と機会を確保した。

単元計画は、以下の通りである。

1	2・3	4・5・6・7・8	9
ガイダンス	1対1競走	2対2・3対3リレー	トラックリレー
チーム編成			男子VS女子 (ハンディキャップ付き)
変形ダッシュ紹介	・5m競走 ・10m競走	・20mリレー ・30mリレー	
試合に1:1			

2-1-3 データの収集及び分析方法



図1 白紙の絵日記

データの収集は、2つ行った。一つ目のデータは、児童の記載した絵日記である。図1のような白紙の絵日記を配布し、1時間の体育授業毎に絵日記を書かせた。二つ目のデータは、児童へのインタビュー内容である。絵日記の内容を補完的に、絵日記の内容を確認するためにインタビューを行った。分析方法としては、「問題と目的」のアイデンティティの三つの概念の観点で筆者の解釈で絵日記を抽出することとした。以上のことから、どのような自己意識、どんな他者からの影響、どんな自己理解がすすんだか事例的に考察する。

2-1-4 分析の対象

分析対象は、本実践を行ったK小学校2年1組の児童の「絵日記」への記述内容とする。児童の「絵日記」とは、毎時、授業終了後に子どもが授業の感想や気づいたことなどを記述したものである。

記述は自由記述であるものの、その内容は教師から児童への個別の声かけや全体指導が記述内容に影響を及ぼしている可能性があることをここで述べておく。このような前提のもと、本研究では、「絵日記」の記述を児童の考えが反映されたものと捉え、これを分析の対象として扱うこととする。

3. 結果と考察

以下、本研究で定義したアイデンティティの三つの概念である「自己意識」「他者からの影響」「継続」に該当する絵日記を抽出し、結果と考察する。以下、3つの概念の結果と考察を抜粋する。

3-1 「自己意識」の概念の結果と考察

図2は、走の運動遊び第1時のN.Yの絵日記である。

この絵日記とインタビュー内容から考えられるN.Yのアイデンティティ形成に影響を与えた可能性のある体育の環境条件は、ウレタン棒

を倒す行為が挙げられる。N.Yは、1対1競走に興味をもっていた。理由としては、今までの体育と異なり、自分にとっていい体育だと思えたからである。第1時のN.Yはウレタン棒を倒すことが、自分には合っていると考えていた。今までの走の運動遊びは、バトンパスがあり、自分には難しいと感じていた。本実践は、ゴールにあるウレタン棒を倒すことで勝敗が決まる。N.Yにとってウレタン棒を倒す行為は、簡単であると思えたようである。よって、N.Yのアイデンティティ形成において、体育のウレタン棒を倒す行為が影響を及ぼしている可能性がある。

3-2 「他者からの影響」の概念の結果と考察

図3は、走の運動遊び第4時のF.Kの絵日記である。

この絵日記とインタビュー内容から考えられるF.Kのアイデンティティ形成に影響を与えた可能性のある体育の環境条件

は、走順とチーム内での話し合いが挙げられる。F.Kのチームは、対戦チームの走順や走力状況に合わせて変更している。具体的には、相手チームの第1走者が足の速い子、第2走者が足の遅い子、第3走者が足の速い子だったとする。その場合、F.Kのチームは、第1走者がF.K、第2走者がS.R、



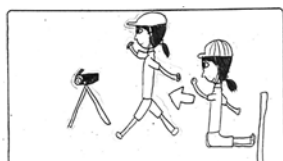
図2 珍しいかけこに興味をもつ自分



図3 走順を工夫している自分

第3走者がS.Yという走順にするようである。第2走者のS.Rが対戦チームの第2走者をリードし、第3走者のS.Yがそのリードを保って、競走に勝利することができる。F.Kは考えていた。また、他のチームと対戦する時は、走力状況などによって、走順を変更していく。これらの走順の工夫は、チーム内での話し合いによって決定する。F.KやS.Y, S.Rが相手の走力状況、走順を吟味し、自チームの走順を決定していくようであった。よって、F.Kのアイデンティティ形成において体育の走順とチーム内での話し合いが影響を与えた可能性がある。

3-3 「継続」の概念の結果と考察



きょうわたしは体いくでかけこりーをやりましどういうかけこかといふとへんけいダッシュというかけこです。へんけいダッシュはからだをうごかしてはいるが、ていどをわたりはかきこが、とにかでなのでもうとが、たけいぶん、なま、たのめたのめたです。

図4 かけこがちょっと苦手な自分

図4は、走の運動遊び第1時の走の運動遊びで、変形ダッシュを行ったことが印象に残っていたようである。変形ダッシュは、止まっている姿勢から走り出す、動きに切り返しがあるダッシュである。絵日記の絵や文章記述にも、変形ダッシュのことがかかれている。そして、KIはかけこに苦手意識を持っていた。その理由を、KIは第1時ではコツをつかんでいなかったし、足の筋力を使ってしまうので、疲れてしまうためであると考えていた。ただし、KIはちょっとだけ嫌な思いをしていたが、学級の皆と走の運動遊びに取り組むことができたため、楽しかったと第1時の自分を振り返っていた。よって、KIのアイデンティティ形成において体育の変形ダッシュと他者と一緒に走ることが影響を与えた可能性がある。

ここから、第1時のKIは「授業のかけこは、楽しい自分」を自覚したのではないだろうか。

図5は、走の運動遊び第3時のKIの絵日記である。この絵日記とインタビューからわかるKI

が影響を受けた体育の環境条件は、スタート姿勢が挙げられる。KIは第3時の走の運動遊びで、コツをつかんだと実感している。そのコツとは、スタート時に踵を上げることである。コツをつかむために、KIは



今日はまたかけこりーをやりまし。まゐのかけこりーよりすくはやくはしれました。なので、とだけアツをのまてた。よくな感じがします。すぐれたのしかたのでアツをのまはれるような感じがします。ホントウにたのしかったです。

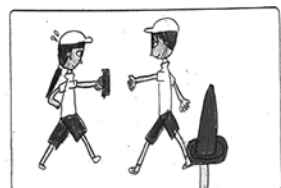
図5 苦手意識が少し解消された自分

足首をひねり、色々なことを試した。そして、スタート時のコツを見つけた。KIにとって足首をひねるとは、踵を上げてスタートするというのである。スタート時は、足の筋肉を使ってしまう。踵を上げてスタートすることで、疲労を軽減できると考えたようである。よって、KIのアイデンティティ形成において体育のスタート姿勢が影響を与えた可能性がある。

ここから、第3時のKIは「コツを少しのみこめ、前向きな自分」を自覚したのではないだろうか。

図6は、走の運動遊び第5時のKIの絵日記である。

この絵日記とインタビューからわかるKIが影響を受けた体育の環境条件は、バトンを持っている時の走り方が挙げられる。KIは、第5時は前時と比較して、大分上達したと感じた。対戦成績は2勝2敗で前時と同じだが、大



きょうはかけこりーをやりまし。まゐくらべてだいぶんうたがはりました。なので2回かてりましました。まゐとあひかずですが、だいぶんはやくはれるようになりました。たのめたのでまたはしりたいです。

図6 苦手意識が少し解消された自分

分速く走れるようになったと実感した。それが実感できた理由は、バトンを持って走ることが上達したためである。KIは、バトンを持って走る時に転んでしまうと、走るのが遅くなってしまうと考えた。そのため、転ばない工夫として、バトンを持っている時は手をゆっくり振ること、足を大きく開いて走ることが大切であると思ったようである。

ある。そのことをやってみたら、速く走れるようになったと認識できたのではないだろうか。よって、KIのアイデンティティ形成において体育のバトンを持っている時の走り方が影響を与えた可能性がある。

ここから、第5時のKIは「授業のかけっこは、やっぱり楽しい自分」を自覚したのではないだろうか。

これらのことから、KIのアイデンティティは、最初は「授業のかけっこは、楽しい自分」であり、次に「コツを少しのみこめ、前向きな自分」になり、その後に「授業のかけっこは、やっぱり楽しい自分」と続いているのではないだろうか。

3-4 まとめ

絵日記とインタビューからわかる体育を通してどのようなアイデンティティが形成されているかを考察し、「自己意識」「他者からの影響」「継続」の概念の結果を示した。この結果から、子どもたちは本実践を通して、4つのアイデンティティが形成されたことが示唆された。4つのアイデンティティを、表にまとめた。これを、表1に示す。

表1 4つのアイデンティティ

「自己意識」に関するアイデンティティ	
1. 体育をいっしょに楽しんでいる自分	
2. コツを少しのみこめ、前向きな自分	
3. 自分の考えを表現でき、楽しい自分	
4. 個と他をわきま、楽しい自分	
5. 授業のかけっこは、楽しい自分	
6. 授業のかけっこは、やっぱり楽しい自分	
7. 思いやりが、楽しい自分	
8. 自分の考えを表現できると楽しい自分	
「他者」に関するアイデンティティ	
9. 相手の心がよく読める自分	
10. コツに体育教師をもらった自分	
11. 経験から、大切なことに気づく自分	
12. 相手の状況に合わせ、柔軟に臨む自分	
「継続」に関するアイデンティティ	
13. 好きな意見を表現し取り入れる自分	
14. 友達からのアドバイスを、参考にする自分	
15. 他者からのアドバイスを実践に繋げる自分	
16. 友達にやり方を聞き、表現する自分	
「転換」に関するアイデンティティ	
17. 急に状況が変わったと、察している自分	
18. 断念したり、悔いている自分	
19. 失敗をばかちやめている自分	

4つのアイデンティティは、体育の環境条件である「ウレタン棒を倒す行為」「スタート姿勢」「バトンの持ち方」「バトンパス」「友達との競走」「変形ダッシュ」「バトンを持っている時の走り方」「自分の思いついたことが共有できる時間」「バトンパスをする時の待機場所」「競走経験と対戦相手との競走」「走順とチーム内での話し合い」「学級集団での話し合い」「走る距離」「他者からのアドバイス」「ハンディキャップ」「競走相手との真剣勝負」の影響を受けている可能性があることが

分かった。

以上のことから、体育では「肯定的」「学習」「他者からの影響」「転換のきっかけ」のようなアイデンティティの形成にいたる可能性が考えられた。

4. まとめ

体育を通して、どんなアイデンティティが形成されたかどうかを検証することを目的とした。

方法としては、「自己意識」「他者からの影響」「継続」の概念に関する絵日記を抽出し、その内容を補完的に補うインタビューをした。3つの概念がどのようにすすんだかを考察した。

その結果、本研究を通して、4つのアイデンティティが形成されたことが示唆された。

4つのアイデンティティは、体育の環境条件である教具や連携、競走、スタート姿勢などの影響を受けている可能性があることが分かった。

そして、体育では「肯定的」「学習」「他者からの影響」「転換のきっかけ」のようなアイデンティティの形成にいたる可能性が考えられた。

不十分な点として、体育授業を通して他の実践、他学年ではどんなアイデンティティが形成される可能性があるのかが不透明であるという課題が残った。今後、他の実践、他学年でも、どんなアイデンティティが形成される可能性があるか検証していきたい。

5. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領，2017，pp.118-123
- 2) 82歳のマラソンランナー中野陽子さんが東京マラソン，そして2020年東京五輪で目すもの <https://melos.media/training/21257/3/> アクセス日 2019. 4. 26
- 3) 105歳の現役スプリンター・秀吉さん100メートル完走 「世界最高齢」ギネス記録更新 京都 <https://www.sankei.com/west/news/150923/wst1509230041-n1.html> アクセス日 2019. 4. 26
- 4) エリクソン：1963，幼児期と社会，W.W ノートン&カンパニー，p.42
- 5) Lave&Wenger：1993，状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－，産業図書，p.54 (指導教員 森 勇示)